

平成 14 年度 大学院入学者選抜試験問題 (第 1 次)
専門科目
経済理論分野

問題は問 1 と問 2 との 2 問からなります。

問 1 以下の (1)、(2) の中から 1 つを選んで解答しなさい。

- (1) 所得 Y を、今期の消費 C_0 と貯蓄 S とに分割し ($Y = C_0 + S$)、今期の消費 C_0 と、貯蓄から実現できる来期の消費 C_1 とからなる効用 $U(C_0, C_1)$ を最大にしようとしている消費者の行動について、以下の (ア) ~ (ウ) の間に答えなさい。
- (ア) 1 期あたりの利子率 i の下で、 Y の所得から実現可能な C_0 と C_1 との組の集合を式で示しなさい。
- (イ) 1 期あたりの利子率 5% の下で、500 万円の所得から、ある消費者が現に 100 万円を貯蓄したとする。この消費者均衡点における、今期消費と来期消費との間の限界代替率はいくらか。
- (ウ) この同じ消費者が、同じ所得の下で、利子率が 10% に上がったときには、来期消費を 121 万円にしたとすると、今期消費に関する、利子率変化の所得効果と代替効果との大小関係について何が言えるか。
- (2) ケインズの「投資乗数」は、1 単位の投資の増加が、どれだけかの所得の増加を引き起こすかを表すものであり、1 から限界消費性向を差し引いたものの逆数に等しい。しかし、ケインズは、この投資乗数の効果を完全には発現させない要因として、利子率の上昇と外国貿易とを挙げている。利子率の上昇と外国貿易とが、投資乗数の効果を完全には発現させないのはなぜかを説明しなさい。

問2 下のA群の(ア)~(エ)の概念から2つを選んで説明しなさい。その際、1概念につき、少なくとも3つの語を、下のB群から選んで使用すること。そして、その語を使用したことを示すためにその箇所に下線を引くこと。

A群

(ア) 資本の限界効率
(イ) 独占的競争
(ウ) IS 曲線
(エ) 外部性

B群

収穫逓増 利子率 生産 貯蓄 所得 ヒックス
限界収入 ピグー 割引率 市場の失敗 チェンバリン
資源配分 効用 ただ乗り 投資 債券 分配 貨幣
ケインズ 自由参入